

（一）現代文

【出題意図】

石原吉郎「失語と沈黙のあいだ」に拠った。初出は『詩学』（一九七二年七月）、底本は『石原吉郎詩文集』（講談社、二〇〇五年一〇月）。筆者は敗戦の年にソ連軍に抑留され、一九五三年に特赦により帰国した戦後詩人である。出題文は詩人自身の失語の体験について語るエッセイであるが、現代に生きる私たちの言語状況にまで通ずる洞察を読み取ってほしい。

【採点のポイント】

問一

文脈をふまえた漢字の読み書きができているか。

問二

失語の自覚と苦痛の体験にはことばが必要であるという逆説を読み取り、傍線部を言い換える問題。

問三

内容理解と説明の問題。傍線部に含まれる指示語の内容を明らかにしたうえで、「周囲の人間とは無関係に起る」「孤独な出来事だ」という記述の意味を、本文の文脈に沿ってそれぞれ適切に説明できているかどうか。

問四

失語の過程とそこからの回復過程を語った本文の展開の中で、失語の最終的な段階についての質問である。失語の最終局面、失語の過程の最後の段階においては、一人の人間が一人の人間に語りかけるための手段であり、また自分自身の存在を確認するための手段でもあることばをうしなってしまった主体は、自己を定位できず、無限にただよってゆく状態にある。

問五

語彙力に関わる問題。

問六

筆者個人の体験を超えて、私たちがおかれている言語状況を失語状態とみなし、そこからの回復の過程に何が必要かを語る結論部に関する設問である。傍線部の指示内容を適切に説明した上で、回復のプロセスになぜ「沈黙」が必要なのかを理解して解答できているかどうか問われる。

【講評】

問一

よみがなの誤答は少なかった。書き取りではイメージで書いているために字形・字体が崩れているものが散見された。オ「怨念」の「刃」を「月己」、カ「衝撃」の「衝」の「亅」を「力」、あるいは「衝」、ク「瞬間」の「目」を「日」などの書き誤りが目立った。また乱雑な書き方で字形が判別できないものもあり、日ごろから〈正しい字形・字体で書く〉ことを心掛けてほしい。

問二

前後の段落から「失語を確認するためにもまた、ことばが必要」であることや、「自覚された状態としての失語」がことばを回復する過程で体験されることをおさえ、「ほんとうの苦痛」がどのようなものであるかを説明する。「どういうことか」と問われているのに、文末が「～から。」「～ため。」などとなっている不

適切な回答が散見された。

問三

「周囲の人間とは無関係に」という意図については、まず傍線を含む段落の末尾に「人間にたいする関心」と説明されているため、適切に解答できている答案が多かったが、これだけでは完答とはいえない。続く二段落分で「自己確認」という側面からの説明が続き、これが「孤独な出来事」という要素に対応しているため、この部分も押さえる必要がある。また、設問の求めに対して不適切な文末で記した解答は減点対象とした。

問四

問われているのはことばをうしなつて、ことばに見放された状態（段階）についての説明である。ことばの主体としての筆者もしくは人間が「すでに」「むなし」くなってしまったそのプロセスに注意してほしい。ことばを失った／奪われたことに気づくのはことばを回復したのちであるから、その段階についての言及は減点とした。あえて沈黙を選ぶ段階について説明しているものも減点とした。筆者の個人的な体験が現代の言語状況に通じるというところにも注意してほしい。

問五

対になることばが直後に「と求心」と与えられているので平易な問題であったが正答は極めて少なかった。辞書を引くことや、その時に「同義語」「反対語」とあわせて学習することを心掛けてほしい。

問六

傍線部の「このような状態」とは、直前にある「今日私たちがおかれている言語的状況」を指すが、どのような状況なのかを補って説明する必要がある。現代は人間の声がどこへもとどかず、言葉が拡散してしまう時代であるという筆者の認識をきちんと押さえて的確に記述するためには、傍線部の直前を押さえるだけでは足りない。また、傍線部の「重苦しい沈黙」を説明しようとしたためか、「よろこばしい過程ではない」ことを強調する答案が散見された。自立した個の人間として「ことばが回復する」には「自覚した行為としての沈黙」と「失語状態への苦痛な反省」が必要であるからこそ、傍線部のような状況が出来るのだという文脈を押さえない。

(二) 古文

【出題意図】

中古末～中世初期の歌人西行の私家集「山家集」から説話的な一節を選び出題。古文に多い主語・目的語を明示しない文章を敬語表現などに注意しながら正しく読解できるか(問二、問三)を見た。基本的な古語の意味や、助動詞の意味用法、反語などの文法知識(問一)、また歌枕や本歌取り等和歌に関する知識(問四、五)などをきちんと修得できているか見た。

【採点のポイント】

問一

「現代語に訳しなさい」という設問であるので、各語句の辞書的な意味を記すだけでなく、文脈に即した叙述になっていることも必要である。各問については、次のことがふまえられているかがポイントとなる。

ア 「都のほかのすみか」が何を指しているか把握できていること。「申さで」の「申す」が謙讓語であ

り、「で」が打ち消しの意味を伴うこと。「いかでか」が反語の表現であること。

イ 「しるべ」が道案内の意であること。命令文であること。

ウ 助動詞「まじ」の打ち消し推量の意味。

エ 文脈から即時性を意味していると解釈すべきこと。

オ 「しるし」は靈驗、「あらたなり」ははっきり現れるさまをいうこと。

問二

「る」「らる」は複数の意味用法で使用され分類が困難な場合もある。本問題文では内容、特に登場人物がきちんと読み取れれば困難なく正解できるだろう。上接動詞の主語・目的語(の人物)に注意し、それ(その人物)に対し他の部分でも敬語が使用されているかどうかを見れば、「尊敬」か否かがわかり、「尊敬」の場合はその対象者も同時にわかるはずである。

問三

ここでは歌枕とされる景勝地「吹上」の美しい景色が折あしく悪天候によって見られなくなったことが予想外であったと誤解なく読み取れるかどうかポイントとなる。

問四

①「天降る」が能因歌をふまえたものであることを理解し、訳出に反映できているか。②第三句の条件接続を正確に訳出できているか。③「吹上の神」の名に着目し、「雲晴れ退きて」の訳出に反映することができているか。④第四句以降が命令の形で神への祈願であることが訳出に反映されているか。

問五

特になし。表記の揺れについては、歌語としての意義に影響のないもの(「天の河」など)は許容した。

【講評】

問一

ひとつひとつの語句の意味を正確に理解していること、文脈に即して適切に解釈していることが求められるが、いずれかの要素が不足している答案が多かった。一方、少ないながらも全問満点の答案があったことは喜ばしい。アでは「都のほかのすみか」を「都にある別の住居」などと誤解しているものが少なくなかった。上文から、待賢門院中納言の局が住む高野山麓の天野の居処とみるべきである。エの「やがて」は辞書的にはさまざまな訳語が考えられるが、西行が二首の歌を社に書きつけたことと、天候が急変して穏やかに晴れたこととをつないでおり、ここでは「すぐに」が適切である。オの「あらたなり」には、新しいさまの意もあるが、ここでは、二首の和歌に応える靈驗が顕著に現れるさまと解すべきであろう。古語の意味を知識として蓄えるとともに、具体的な用例に触れ、作品の中に生きることばとして解釈する経験を積んでおきたい。

問二

a・b・eの「尊敬」、c・dの「受身」については多くが正解できていた。ただ「自発」「可能」、なかには選択肢にない「使役」という誤答もちらほら見られた。「尊敬」の対象者については、aの正解率は高かった

が、その他はやや低い。eの解答に「西行」と「人々」とが見られたが、これらに対しては他の部分で尊敬語(主語のとき)や謙讓語(目的語のとき)が使用されていないことに注意して欲しかった。

問三

注にある金葉集の能因の話に影響されてか「能因の歌の話のように吹上では雨が降らないと思っていたのに大雨で予想外」などとする解答が多くあった。能因の話は「伊予の国」のことで、「吹上」のことではない。また直前の「社に興かきすゑて」の影響か、「吹上神社の荘厳さが思ったほどではなかった」とする勘違いもあった。他にも雨風に関係なく「予想したほどの見所はなかった」とする解答もあったが、西行の歌で晴れた後「吹上、和歌の浦、思ふやうに見て帰られにけり」とあるので、一行が聞いた通りの美しい景色を見て満足して帰ったことがわかるだろう。落ち着いて注も含めて文章全体をよく読み、示された全情報を把握してから考察することが大切である。

問四

大意をとれている解答は多かったが、先掲①③のポイントが不十分な答案が少なからず目についた。①については注中の能因歌にある「あま(天・雨)くだります神ならば神」に着目することが求められる。そこに思い至らず、「天から降った名……」などと訳したものが多数見受けられたが、そのように訳すと③のポイントも見誤ることになる。また、「名」を訳出せず、「吹上の神であるならば」とだけ記したのも多かった。「吹上」の「名」からの連想で、雨雲を「吹き」払う祈願へとつなぐという西行の意図を理解し、正確に訳出したいところ。

問五

誤答として「西の風」や「和歌の浦」、中には五音句ですらないものを記した答案もあったが、全体的によくできていた。当該歌が注中の能因歌をふまえたものであることに気づけば、比較的容易であったとみえる。注の内容は本文読解上の必要あって附されているものであるから、この間に限らず軽視すべきではない。

(三) 漢文

【出題意図】

今年度は『呂氏春秋』からの出題。総字数百三十字程度で、ほぼ例年なみの長さの文章。返り点・送り仮名を手がかりに内容を正しく読み取る力を備えているか、また、返り点の付け方や、基本的な語句の読みなど、漢文を読むための基礎的な学力が定着しているかを主眼に出題した。

【採点のポイント】

問一

漢文を読解する上で最も基本的かつ重要な語の読みについて問う問題。A「与」は「と・ともに・か」(疑問)等、様々な読み方をする、漢文における最重要語。文脈から、「と」と読むことが明らかであるが、「ともに」と解答しているものも正解とした。Bの「謂」は、動詞として用いられることが多いが、ここでは名

詞（いひ）で読むべきところ。旧仮名遣いでない答案は減点した。C「若」も、「ごとし・もし・なんぢ」等、色々な読み方をする重要語。単に読み方を知っているだけでなく、前後の文脈からどう読むべきか、的確に判断することが求められる。送り仮名がついていないもの、不適切な答案は減点した。

問二

書き下し文に従って返り点を正しく付けられるかをみる問題。完答のもののみ、点数を与えた。返り点を付ける問題は、ほぼ毎年出題している。入門期の学習がしっかり定着していれば、容易に正解できるはずである。完答のもののみ点を与えた。

問三

問題文の内容を的確に読解できているかを問う問題。文公が士（部下）との約束を守り、原が陥落寸前であるにも関わらず撤退したことで、部下の信頼はもとより他国からも一目置かれるようになったという大意が理解できれば、正解出来る問題であろう。誤字は減点、二十五字に満たない答案は0点とした。

【講評】

問一

A・Cはおおむねよくできていたが、Bは正答率が極めて低かった。本学科入学後も必要な知識なので、重要助辞の読み方はしっかり勉強しておいてほしい。

問二

おおむねできていた。本学科受験を希望する者は、返り点の付け方ぐらいはしっかりと学習しておいてほしい。

問三

予想していたよりは正解率が高かった。「誠信」が約束を守る文公のことで、「得之」が原国を降伏させることと理解できていれば、それほど難しくはなかったはず。与えられた字数の中での確にまとめきれていない答案や、逆に指定字数に満たない答案も一部にあった。字数制限のある問題の演習も、普段からしっかりとやっておきたい。